

【資 料】

令和元年度食肉・食鳥肉病理組織検査担当者
育成研修会における症例報告(1)

鈴木 竹彦 鎌口 綾華

北海道帯広食肉衛生検査所（〒080-2465 帯広市西25条北2丁目1番地）

はじめに

北海道食品衛生課主催の標記研修会が令和元年9月25～26日に国立大学法人帯広畜産大学において開催された。本研修会では、道内の食肉衛生検査所および食肉検査を担当する保健所のと畜・食鳥検査員8名が提出した症例（牛3症例、豚5症例）について、同大学基礎獣医学研究部門病態予防学分野 病態病理学研究室 古岡秀文教授のご指導の下、検討を行った。

今回、本研修会で検討された症例の中から4症例（標本番号86～89）の概要について報告する。

標本番号：86

提出標本：牛の内腸骨リンパ節

提出者：齋藤麻矢 早来食肉衛生検査所

動物：牛、黒毛和種、雌、128カ月齢

生体検査所見：体格小、元気消失が認められた。

解体検査所見：内腸骨リンパ節は乳白色調で約12×10 cmに腫大していた。

剖面は膨隆し、境界不明瞭な腫瘤塊が島状に突出していた。肺、肝臓、腎臓の実質に1～3 cm大の同様の腫瘤塊が散在していた。また、子宮壁は1.5 cmに肥厚、硬度を増し、剖面は平滑で乳白色、構造不明瞭であった。肺、肝臓、脾臓、胃大小腸の漿膜、胸壁および腹壁に0.5～3 cm程度の無茎性腫瘤状結節が播種状に多数みられ、いずれも乳白色から淡黄色で硬結していた。大網、直腸周囲にも腫瘤塊の形成がみられた。

病理組織所見：内腸骨リンパ節では、腫瘍細胞はシート状に増殖し、肺、肝臓、子宮の腫瘍組織では胞巣状構造が多く認められた。主な腫瘍細胞の核は、大型でいびつな類円形、クロマチン粗で大型の核小体を持ち、細胞質は豊富、弱好酸性で内部は明るく見えた。腫瘍細胞同士が密着したり、2核から3核の多核細胞を形成するものや印環細胞様のものがみられた（写真1）。細胞質に

は好酸性の小体が散見され、PAS反応強陽性であった（Melamed-Wolinska bodies）（写真2）。免疫染色で腫瘍細胞はサイトケラチンAE1／AE3陽性、ビメンチン陰性であった。

病理組織診断名 移行上皮癌を疑う

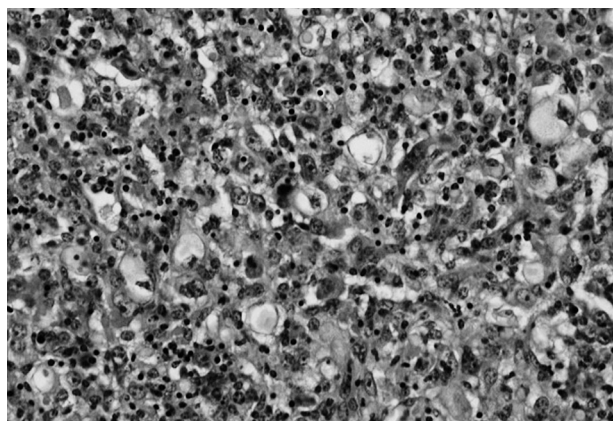


写真1. 牛の内腸骨リンパ節
腫瘍細胞はシート状に増殖して、中には多核の印環細胞様の腫瘍細胞を認め、細胞質には好酸性の小体が散見される（HE染色）

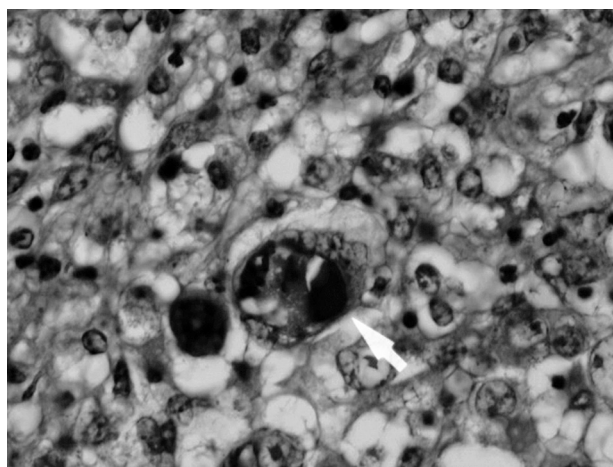


写真2. 牛の内腸骨リンパ節
多核の印環細胞様腫瘍細胞にPAS強陽性の含有物を認める（PAS染色）

標本番号：87

提出標本：豚の胃

提出者：田中伊万里 東藻琴食肉衛生検査所

動物：豚、ランドレース系交雑種、去勢、6カ月齢
生体検査所見：著変は認められなかった。

解体検査所見：胃小弯部漿膜面の幽門部～噴門部間に硬結感を認めた。病変部には、胃壁硬結部を覆うように4×3 cm大に隆起した脂肪組織様白色腫瘤を認めた。病変部を刀割すると、漿膜下に白色で硬結感を有する組織の増生を認め、胃壁は約2 cm厚に肥厚しており、正常部との境界は不明瞭だった。他臓器および胃粘膜面に著変は認められなかった。

病理組織所見：筋層部に膠原線維が増生し、同部は正常部と比較し約2倍に肥厚していた。また、増生した膠原線維が筋線維間を圧迫し、筋組織の配列の乱れが認め

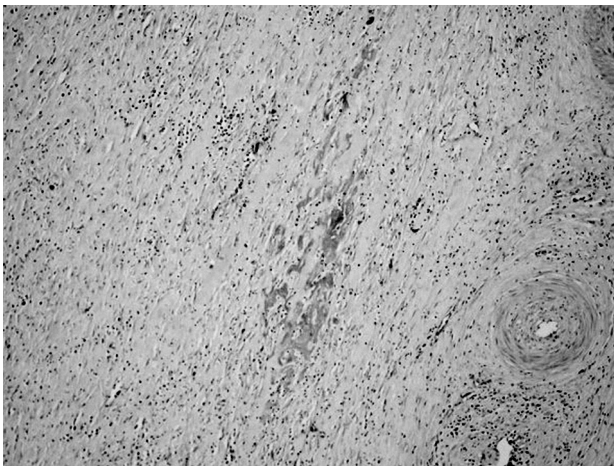


写真3. 豚の胃

筋層下から漿膜にかけて膠原線維が増生し、その一部は好酸性を増し硝子変性を認める（写真中央）（HE染色）

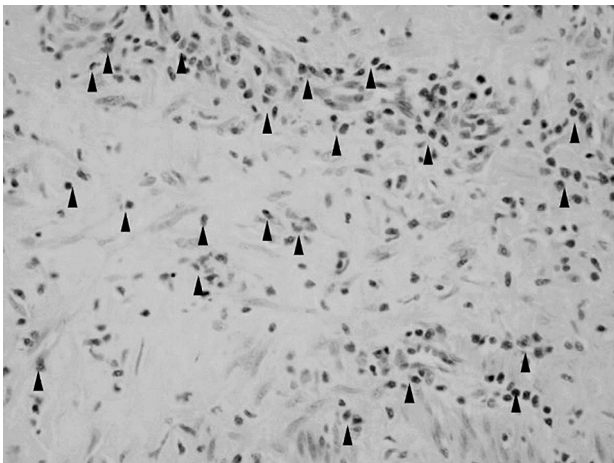


写真4. 豚の胃

粘膜筋板から漿膜にかけて好酸球様の細胞浸潤の散発（矢頭）を認める（HE染色）

られた。同様に、筋層下から漿膜にかけて膠原線維で構成された結合組織層の形成がみられ、病変部の胃壁は正常部と比較し3倍程度肥厚していた。また、同結合組織層中には脂肪組織および血管様管腔構造の形成が島状に散発し、一部では膠原線維の硝子変性が認められた（写真3）。さらに、粘膜筋板から同結合組織層にかけて、細胞質内に好酸性顆粒を持つ細胞浸潤の散発が認められた（写真4）。

病理組織診断名：胃の小弯部にみられた好酸球浸潤を伴う慢性漿膜炎

標本番号：88

提出標本：豚の脾臓

提出者：西山香織 東藻琴食肉衛生検査所

動物：豚、ランドレース系交雑種、雌、48カ月齢
生体検査所見：著変は認められなかった

解体検査所見：脾臓が著しく萎縮し（長さ約25 cm、幅約1～6 cm）、捻れて、大網と癒着していた（写真5）。刀割すると、やや硬結感があった。断面の膨隆は認められず、脾髄は不明瞭であった。その他臓器に著変は認められなかった。

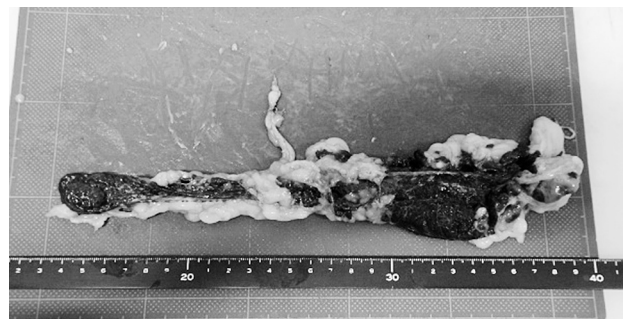


写真5. 豚の脾臓

著しい萎縮が認められる

病理組織所見：脾臓は蛇行し、厚みを増していた。白脾髄は不明瞭、脾柱構造は乱れていた。皮質および実質に赤血球の浸潤およびヘモジデリンの沈着を認め、特に皮質と接する実質にヘモジデリンが高度に認められた。脾臓内の毛細血管の血管中膜には石灰沈着（ガムナ・ガンディ・ボディー）が認められた（写真6）。脾臓を構成する主な細胞はリンパ球であり、核分裂像や異型性は認められなかった。

病理組織診断名：高度のヘモジデリン沈着と血管壁のガムナ・ガンディ・ボディーを伴う脾萎縮

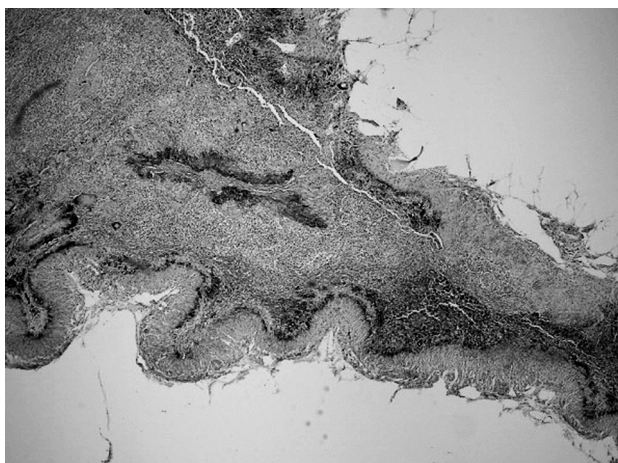


写真 6. 豚の脾臓
ヘモジデリン沈着と血管壁の石灰沈着を認める
(HE 染色)

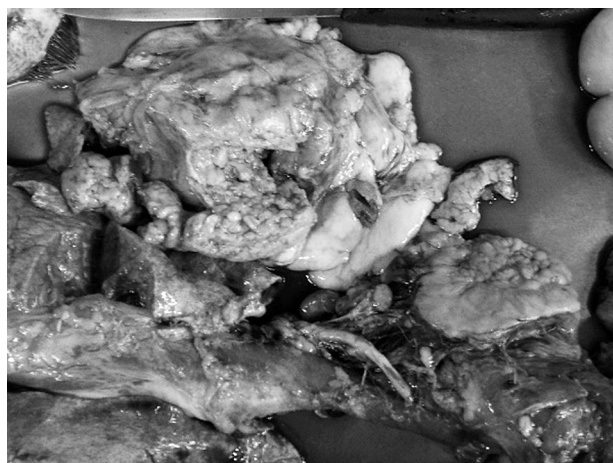


写真 7. 豚の縦隔前部腫瘍
周囲の臓器とは明瞭に区画されており、乳白色
髄様を呈す

標本番号：89

提出標本：豚の縦隔前部腫瘍

提出者：帯広食肉衛生検査所 鈴木竹彦

動物：豚、ランドレース交雑種、雌、6 カ月齢

生体検査所見：著変は認められなかった。

解体検査所見：縦隔前部に被膜に包まれ、周囲の臓器とは明瞭に区画された直径20 cm 程の腫瘍が認められた (写真 7)。腫瘍は乳白色で、断面は髄様を呈し結合組織により結節状に分画されている部位も認められた。また、背割り後の頸部内腔は同様な腫瘍で占められていた。下顎リンパ節はウズラ卵大に腫脹していたが、その他臓器に著変は認められなかった。

病理組織所見：腫瘍の一部辺縁に胸腺様固有構造 (暗調を呈する部分の皮質と明調を呈する部分の髄質) が認められた。固有構造が消失している部分は、明調を呈し、主として中型で幼弱なリンパ球で構成されており、核分裂像も認められた。その他、淡明な大型の核で境界不明瞭な弱好酸性の細胞質を有する上皮性細胞も認められ、それらが癒合したハッサル小体様構造も散見された (写真 8)。また、星空像も認められた。免疫染色において、

リンパ球は CD 3、上皮性細胞はサイトケラチン AE 1 / AE 3 に陽性を示した。下顎リンパ節は、皮質と髄質の区別はやや不明瞭であったが、ろ胞は明瞭で、リンパ球の異型性は認められなかった。

病理組織診断名：胸腺腫

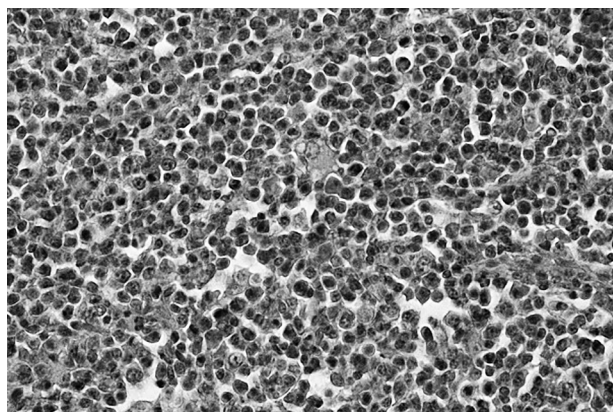


写真 8. 豚の縦隔前部腫瘍
胸腺固有構造消失部分は、核分裂像も認められるリンパ球と淡明な大型の核で弱好酸性の細胞質を有する上皮性細胞から構成されている (HE 染色)